時空を超えた草花たち

たんぽぽは春の花じゃないの？

わたしたちの周りを見回してみれば、よその国からやってきたモノが意外とたくさんあることに気がつきます。歴史的な文化遺産として大切に保護されているものもあれば、毎日のくらしのなかに入り込んで、日本産みたいになっているものもけっこうたくさん。

今号の特集『渡来・東西！』では、東西南北、いろんな国からやってきたさまざまな渡来モノ探しにトライしてみました。

まずは、まさしく日本の風土に溶け込み、地に根を張って生きている、海を渡ってきた植物たちです。

花の色でいちばん多いのは青系だそうです。でも、春、桜までに咲く花の四割は黄色。春を運ぶ、太陽のかけらのような黄色い花といえば、レンギョウ、マンサク、菜の花、足元にはクロッカス、タンポポ……。

ところが、春でもないのに道端でタンポポの花を見かけることがあります。秋になっても花が咲いているようなタンポポは、外国から渡ってきた種類のものです。

帰化種と在来種との見分け方は意外に簡単。在来のものは、総苞片（そうほうへん）が重なり合って立っていますが、帰化種はその外側のものが反り返っているので一目瞭然です。

いま日本には二十数種類のタンポポがありますが、滋賀県下では、七種の在来種と、二種の帰化種の分布が認められています。

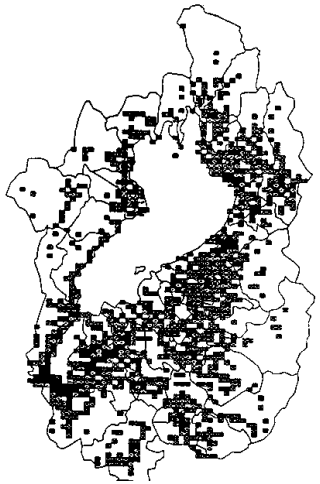
昨年、琵琶湖博物館開設準備室がおこなった県内におけるタンポポの分布状態の調査報告によると、在来種の占める割合は五十六％。二十年前の調査と比べてみると、帰化種が増えてきていることがわかりました。この調査には、県内五十市町村全域から六千個以上のタンポポが送られたそうですから、読者のみなさんのなかにも、近くで採集したタンポポを送られた方がいらっしゃることでしょう。

また、分布の様子を見てみると、帰化種、在来種ともに、人の生活している場所に広く見られることが分かりますが、帰化種のみが見られる地域は、安曇川町、高島町、草津市、守山市、長浜市などの市街地に目立ち、最近人の手が加えられた場所に多いようです。在来種を圧して分布しています。

帰化種が分布域を広げやすいのは、

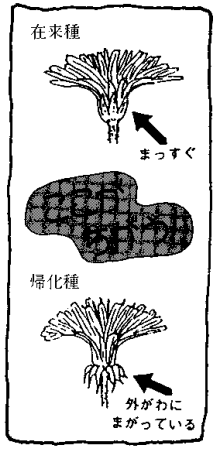
- 種子が小さくて数が多いこと
- 種子はすぐに発芽すること
- 株ができるとすぐに花を咲かせ、種子をつくること

などによります。



「滋賀県のタンポポ分布・1993年タンポポ調査中間報告」より

■…タンポポの分布が報告された地域
▨…在来種、帰化種両方の報告があり、帰化種の方が多い地域



海を渡ってきた草花

オオイヌノフグリ

ムラサキカタバミ

シロツメクサ

オオマツヨイグサ

シロツメクサはパッキング材だった

一般に帰化植物と呼ばれるのは、鎖国が解かれ、外国との行き来が盛んになってきた明治初期、人間の移住、農畜産物や栽培植物の輸入などによって日本に入って来て根づいた植物をさしていますが、今から二千年以上も前、弥生時代まで遡ったころには、稲作とともに渡来してきた植物がありました。

いずれにしろ渡ってきた植物は、適合する風土や、生存競争の相手となる在来種のない裸地に入り込んで育ち、野生化していったのです。

戦後驚異的な速さで増え、花粉症の元凶と間違われていたセイタカアワダチソウ、花粉症の真犯人・ブタクサは、ともに北アメリカ原産。夏、黄色い花を咲かせ、一般にツキミソウという日本情緒あふれる名で呼ばれるオオマツヨイグサも北アメリカ生まれです。

江戸時代、オランダから幕府に贈られたガラス製品が割れないように詰められてきた草花は、しあわせの四つ葉のクローバを探したシロツメクサや、夏、菊のような小花をたくさんつけるヒメジョオン。詰め物にしたところからツメクサと呼ばれるようになったそうです。同じマメ科で、首飾りや王冠を編んで遊んだレンゲは、中国原産の草花です。

江戸末期、鑑賞用として南アメリカから持ち込まれ、栽培されたムラサキカタバミ。たしかにきれいな花ですが、鱗茎と呼ばれる根でどんどん増え、今では誰でも道端で簡単に〝鑑賞〟できるようになってしまいました。

トゲトゲのついた実を「ひっつきむし」と呼んで投げ合いっこしたオナモミは日本在来種ですが、昭和初期に北アメリカから渡来したオオオナモミに駆逐されつつあります。春いちばんに青い星のような花をつける、ヨーロッパ、アフリカ原産のオオイヌノフグリも

伊吹山と薬草は深い仲？

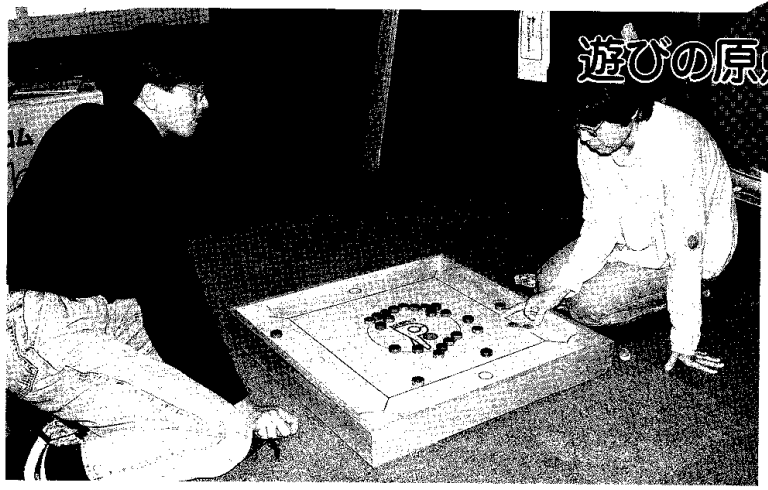
伊吹山には、ここだけに帰化したヨーロッパ原産の植物が現在も広く分布しています。イブキノエンドウ、キバナノレンリソウ、イブキカモジグサの三種がそれです。また、ヒメフウロも伊吹山近辺のほか大和四国地方だけに見られる帰化植物です。

伊吹山には、「織田信長が三合目あたりに薬草園をつくらせた」という伝承があります。安土城で信長に謁見したポルトガルの宣教師フランソワー・ガブエルの願いを聞き入れて、伊吹山に薬草園を開かせたというものですが、先述の四種は、このとき薬草とともに移植され、帰化したもののようです。

伊吹山と薬草とは、信長が薬草園をつくらせるより以前から深い関係にありました。平安中期の延喜式のなかに、諸国から貢進された薬物の種類や数量が記されていますが、そこに記されている「近江七十三種、美濃六十二種」は最高の数です。この数には、両国にまたがる伊吹山で採取される薬草が多く含まれていると思われます。

遊びの原点…

カロムとカルタ



カロムは謎の多いゲームなのだ

ひとつの怪獣が日本にあらわれている。トイザラスという怪獣が。

「トイザラスってステゴザウルスの兄弟？」などと尋ねる人は、長浜の神戸町通りにある玩具店太丸屋の奥さんの言を聞いてほしい。

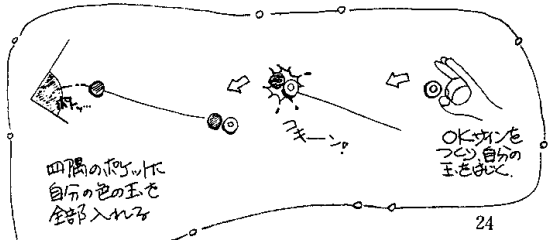
「トイザラスで売っているのは、六割がアメリカのオモチャ。舶来もあんな形でこられると、かなわんわ」と藤居由美子さん。

トイザラスだけでなく、薄利多売の大型玩具店が近年増えている。目先を変えて、どんどんオモチャを買わせる。子どもたちは、それを自分たちの知恵でアレンジしたり、ゲームを工夫する暇もない。与えられるだけだ。

昔は、カルタでもカロムでも、その道の達人がいた。そういえば、カルタやカロムという言葉は、南蛮っぽい臭いがする。

カルタは、いろはかるたや百人一首で、おなじみの遊び。どこの国でも、どこの地域でも昔からある字合わせカード遊びだ。問題はカロム。どういうわけか、湖北・湖東に住んでいる三十代後半以上の人のほかは、あまり知らないという謎の遊びなのだ。

カロムを知らない人のために、そのアウトラインを紹介しておこう。まずビリヤードの台を、麻雀台くらいの四角い大きさにしたものを思い浮べてほしい。次に、ビリヤードのキューの代わりに、五百円硬貨大のカルミンをイメージする。カルミンとは、あの円筒形の輪切りに並んだ白いお菓子のこと。そのカルミンもどきが、赤と青の二種類、十二個ずつある。そして特大カルミンの親玉が一個。「フーム、これはおいしそうだ」と言って食べてはいけない。黙って、親指と中指でOKのサインをつくりなさい。そして、ビリヤード棒の代わりに、OKサインの中指でカルミンもどきをはじく。これを自分の色のカルミンに当てて、四隅の穴に入れ合いっこするわけでありますね。



古道具屋のカロムに目頭熱く

「それなら昔、地蔵盆や正月にようやった」と、懐かしのカロム少年少女時代を思い出し、そっと目頭を押さえたりする人もいるに違いない。

実は、わたしも長浜の大手門通りにある大江古道具店の前で、目頭を熱くしたのだ。セピア色の簞笥や掛軸、太鼓などに混じって、ピカピカのカロム台が並んでいる。わが懐かしの少年少女時代があった。無意識のうちに「懐かしかった、会いたかった。カワイイやつめ」とカロム台に頬ずりしていると、「懐かしおすやろ」と、カワイイおばあチャンに声をかけられた。八十一歳になる、お店の大江志うさんだ。

「子どもの時分にようやりました。おばあチャンらの子どもの頃は？」

「やらいでかいな。大正時代から流行ってましたがな」

「古道具にしてはピカピカですね」

「昔からカルムは、彦根から仕入れて、新品を売ってますんや。お古やおへんで」

お店の正札には〝カルム9500円〟とある。広辞苑にはカロムと載っているが、そういえば、長浜ではカルムと言っていた。

カロムの語源は？　いつごろ日本に来たの？

なぜ長浜と彦根周辺にしかないの？

謎は深まるばかりだ。ここは、最近カロムの家元宣言をし、カロム日本選手権大会を開いている、彦根に行ってみなければならない。そこで、タウン誌DADAで、時々カロムを取り上げている、本町通りのDADA編集室を訪ねた。

大江古道具やの志うさん

太丸屋の由美子さん

みんな自分流のルールで遊んだ

編集長の杉原正樹氏は、直系カロム家元のカロム学の権威だ。

「十二世紀ころに、エジプトあたりでカロムの原型が生まれたらしい。それがイギリスに渡り、ビリヤードとカロムに分かれた」

「いつごろ日本に？」

「明治末期にイギリスからYMCAによって伝わったものと、昭和になってアメリカから来たものがあるようだ」

「カロムの語源は？」

「円筒形の輪切りのこと。カルミンと語源はいっしょである」

「なぜ彦根・長浜周辺だけに？」

「メンソレータムで有名なヴォーリズさんが、持ってきたという説もある」

「長浜のカルムは、彦根産でしたが……」

「いまも彦根だけでつくられている。大正九年からある中野木工所と、最近JCのOBが開業した〝巧房OLDandNEW〟だ」

「彦根でカロムの全国大会をやっておられるようですね」

「カロムは底が深いゲームだ。彦根より長浜のほうが達人が多いし、ルールも高度だとも聞く。ぜひ家元と本家、カロムとカルムで勝負してみたい。アンタ一勝負やってみん？」

というわけで、杉原博士とカロムをやりながら話を聞いたわけだ。結果は僅差で杉原博士の勝ち。そうだ、わたしたちの子どものころは、仲間うち流のいろんなルールを考え出して、技を競い合った。

そういえばカルタも〝ウンスンカルタ〟というカードを、ポルトガル人が南蛮貿易で伝えたものだが、日本人はそれをいろはカルタなどに、見事にアレンジしている。

最近、県で近江百人一首がつくられたり、長浜市では環境教育の一環で、環境カルタがつくられたりしている。環境カルタは、市内の小学校の子どもたちが、絵と標語をつくり、それをいろは順に組み合わせたものだ。

遊びの原点は、創意と工夫なんだ。新たな創造は、遊びから始まる。いまのファミコンやキャラクターズは、受け身のオモチャばかりで、子どもの思考を記号化、画一化するだけだ。わが子を創造力いっぱいの子どもに育てたかったら、カロムとカルタを教えてほしい。きっと正しいカロムニストになる。

カロムの問い合わせ先
彦根市本町北風写真館、DADA編集室
☎〇七四九―二七―二六一〇
環境カルタの問い合わせ先
長浜市役所生活環境課
☎〇七四九―六二―四一一一
近江百人一首の問い合わせ先
滋賀県文化振興事業団
☎〇七七五―二七―八三六九